

## 一切れ回顧 旅順（少年時代）

①当時日本の領土だった旅順 <日本統治時代の表示は日本国関東州旅順市>で我が家はこの旅順市三坂通りにありました。

日露戦争の代償としてロシアから得た日本の領土です。明治・大正・昭和初期にかけ戦勝国日本の新興都市として大いに栄えた日本の街でした。



誕生頃の同地域  
写真 **Click !**

②日露戦争の勝利国🇯🇵日本は軍国主義の道をひたすら歩み続けます。

目指す姿の真っ只中にあったのが旅順でした。

日本軍最強と言われた関東軍の総司令部がここにありました。そして最長を誇る満州鐵道(満鉄)本社もここにありました。

まさに西欧国に肩をならべる新興国日本 Nippon の象徴とされていたのです。

(精一杯の見栄を張っていたのですネ)

③日本の野望と言われる <満州国の創立>。

当時の国際連盟に日本が提案したけれど 60 対 1 で否決されます。1 の賛成は提案国の日本のみ。当時の松岡代表が国際連盟を脱退して帰国したとき 日本国民は『ようやった』と変な強がりを見せたりして、この前後頃から 日本は暴走が始まっていたのですが、軍国少年は知る由もありません。

(註: 日本が国際連盟を脱退したのは1933年・私の生まれた年)

ただ教えられたとおり『日本は世界でただ一つの神の国である-神様がつくった唯一の国が日本で天孫降臨から始まると言う-歴史を教え込まれ 全く無垢の少年でした。

私に限らず日本の子供達すべてがそうだったのですが、信じられますか。でも本当の事なのですよ。

④国際連盟を脱退した日本国の独走(暴走)が加速していきます。

勝手に満州国を創設、皇帝を立て傀儡政権をつくり 思い通りに中国侵略を加速させます。これら一連の行動はすべて 関東軍の独走で始まり参謀本部はこれを事後承認するという、ありさまでした。これらの暴走に世界(欧米列国)が黙っているはずはありません。

経済封鎖で日本を締め上げます。

資源の無い国日本はこの経済封鎖で締め上げられ、ついに

昭和 16 年 12 月 8 日未明真珠湾を空爆攻撃して、米英両国に対し宣戦を布告。

“大東亜戦争”が始まったのでした。

資源の無い 小国日本が 世界の大国米英に勝てるわけがありません。

どんどんと追い込まれ、成年者はすべて軍隊に入れられます。それでも国民は「欲しがりません 勝つまでは」と食糧までが不足するなか頑張りました。戦いはどんどん負け戦 東京大阪をはじめ各主要都市は連日のように空爆を受けます。耐えるだけ耐え忍ぶだけ凌いだ後に、降伏する事で悪夢は終焉。

敗戦国の苦悩が始まることとなります。

⑤私は 開戦時は 小学 3 年生の 12 月 8 日、敗戦時は 中学 1 年の 8 月 15 日でした。

旅順中学は関東州で競争率の高い名門校でしたが、何とか合格して 4 月から通学が始まりましたが 2 ヶ月後 6 月から学徒動員が始まり、学校に登校せず作業場に直行、昼食は大きな釜で炊いたご飯をスコップで一年生 60 余人分を桶に入れてもらい各自が、お汁と一緒にそれぞれ注(つ)ぎに行くというような日々でした。

学校(校舎・教室へ)に通ったのは 4 月・5 月の 2 カ月だけが学習の期間でした。

この学徒動員作業は“石炭おろし”で貨物に積んできた石炭をスコップでおろすという作業です。1年生と2年生はこの作業で、3年4年5年生は別の作業だったようです。(旧制中学は5年制度)

この8月15日(正午に重大放送があるという事で)全員広場に集められラジオに拡声機をつけて放送を聴きました。

“ガーガー”ばかりで何の放送か分からないところ 校長先生が高い段に上がって『停戦になった……。今日の作業はこれまでにして校舎に帰ることにする。』ということで 全員校舎に引き上げました。

註)校舎教室には兵隊さんが入っており、われわれ生徒が知らない間に兵舎として使われていたのだったが、

教室に入ると兵隊さんが皆 声を上げて泣いている……。『負けた、負けた』と言って泣いている。

我々は『エー負けたって、そんなバカな』と俄かには信じられなく『一時的に停戦をするのではないか』と思ったのです。開戦からずっと<神国だから負けない必ず勝つ>と思い込んでいたからです。

⑥“学校から連絡するので自宅で待機するように”言われ校舎から帰宅したが、それから何の連絡もないうちに8月18日ソ連軍が戦勝軍として入ってきて戒厳令を布いた。

日本人は総て収容所へ。収容所といっても映画などで見る鉄条網で囲んだ小屋ではなく、日本人が経営していた幾つかの旅館の部屋へ集められた。

ひと部屋に何所帯かを、大広間なら5所帯～7所帯くらいでタタミ1畳 1人の割合の集団生活である。現在、水害時などで広間に避難することがあるが、ちょうどあのような形で収容されていたのです。当然ながら我が家・家具などは接収され財産はすべて押収された。日本人は皆んなだから仕方がない、進駐ソ連軍にとって日本住民は捕虜扱いでしかない。日々の食糧はそれぞれの収容所に日本人が自主的に『日本人世話会』というものをつくり、ソ連軍と何とか交渉をしながら日々を賄うという始末。

ソ連軍としては“そんなことまでは知らないぞ”という態度、占領した地区の住民の面倒までは見られない！というの仕方がない。

それとともに大問題が起きている、占領軍部隊は第一線で戦う兵隊だから兵士たちは質の悪い者が多い。こいつらが“ウオッチ、ウオッチ”と叫んで収容所に入ってくる。

腕時計がほしいのだ。

略奪した腕時計を手首から肩近くまで10個位も巻き付けてカチカチ動くのを喜んでいる奴もいる。

“ウオッチ、ウオッチ”はまだいいとしても許せないのが“マダム、マダム”である。

説明の必要はないと思うが 私の母など頭は丸刈りでズボンを履いていた。

旅順中学の生物の先生が妹さんを犯されては とばかり抵抗して撃ち殺されるという悲劇もあった。

戒厳令が布かれているので午後9時以降外出は出来ない、外へ出ると忽ち銃撃にあう。この時間は日本人は勿論だが、満人も同じである。民間人は一切夜分の外出禁止である。(満人というのは中国人の事、当時満州国の住人ということで中国人のことを満人と呼び、中国本土の住人を支那人と呼んでいた。)

集団生活のなか虱が発生して発疹チブスが流行、かなり多くの幼児・小児が亡くなった。

各日本人収容所では食糧確保のつぎに清潔維持に腐心していた。

“10月に引き揚げ船が来る” “11月には引き揚げ線が来る” 根拠のない デマに翻弄される日々、話題はこんな事しかなくなっている。結果、正式な引き上げ船は来ないままだった

⑦翌 昭和 21 年 3 月末、ヤミ舟で逃げる (漁船が日本人を対象に大連から南朝鮮まで運ぶ<38 度線の少し南・確か中文津(ちゅうもんしん)という所だったと思うが>。ヤミ舟側も相手はソ連軍だから命がけ、ずいぶん高い(料金?)を取らなければ引き合わない。大人も子供も“一人幾ら”で荷物も リュック1つが人間と同じ条件である。

三所帯 十数人と幾つかのリュックが 夜中にこっそり、戒厳令実行の目を盗んで漁港から帆船で逃走。エンジンは付いていない帆船だから 帆まかせ風まかせの逃走劇。風向きが悪かったので、計算では2日のところをまる4昼夜かかった。食糧はもちろんだが水が無い、喉の渇きにこらえきれず海水を飲んだら塩辛くてと

でも飲めるものではない。みんな鋒鋸の体で、ようやく中文津(ちゅうもんしん)とやらに着いたとき 舟から飛び降り、田んぼへ走った。田んぼの水を手ですくって飲んだ。泥水であろうとなかろうと誰もがそうした。

ここ中文津は田舎町の漁港に過ぎないが38度線の僅か南、アメリカ軍の支配権地域である。しばらく経つとアメリカ軍の見回り隊？が来て我々を救護所のような所へ連れて行きパンなどの食料も与えてくれたうえに、軍が使っている船で釜山まで連れて行ってくれた。

当時のアメリカ軍とソ連軍の違いは海と山ほどありアメリカ兵はお人好し、そのものに見えた。

釜山からは本格的な引揚者対策が立てられており、本土帰郷者は山口県の仙崎港へ九州帰郷者は博多港へと。大型の上陸用舟艇で、甲板の前部分を開くとジープや戦車がそのまま地上へ走れるという米軍自慢の軍艦だった。

多数の引揚者家族をジープや戦車にかえて甲板に載せ それぞれの引揚港へ。仙崎港に着き上陸の段取りのため数時間、沖から本土を見て過ごしたが、はじめて見る日本本土の印象は『緑が広がってるなあ！』だった。

⑧父の故郷は山口県熊毛郡上関村字祝島という瀬戸内海にある半農半漁の小島で、父は徴兵検査の後、大志を抱いて？満州に渡り、旅順で起業 軍関係の建築業を営んでいたの島を出てから30余年故郷には1度も帰っていない。

父は末っ子なので両親は彼が島を離れる時すでに死去していたので、故郷の島には長兄と次兄と姉が1人それぞれが所帯を持ち、長兄が継いだ『今中家の本家』は長兄の息子の代になっていました。本家を継いでいるその人、父から見ると甥になるのだが歳の差は6才、子供も私と同じ娘をはじめ3人いました。

引揚者だからといっても本家に転がり込む訳にも行かず、姉の家の近くに住む所があったので取敢えず其処に入りました。半農半漁の島ですから父の仕事はありません、半年足らずで母の故郷(熊本県飽託郡河内村・現在は熊本市になっている)へ行きました。

註) 母の実家はミカン農家でミカン山も持つ裕福な農家ですが後継ぎの長兄は早くから朝鮮京城(韓国ソウル)で事業に成功し若手実業家として名を上げ、大きな屋敷を建て弟妹を呼んで暮らしていました。母はこの兄の知人の紹介で父と結婚したのでした。

⑨ここ母の故郷で世話になっているとき、父のもう一人の姉が神戸に居て主人の実家が岡山にありそちらに行くことになったので家が空く、よければ神戸に来ないか。(当時米は配給 農家は羨しい)

旅順での都会暮らししか知らない父母にとっては 言う事のない有難い話なので一家は神戸に移住し、ようやく暮らしは定着しました。

この年の12月 私は神戸の神港学園中学へ入学しました。入った時すぐに期末試験があり1年のブランクは大きく成績は最悪、席次は161人中160番お尻から2番目で劣等生そのものでした。

敗戦の翌年の事、教科書は中途入学生のみまで有るわけではなく、勉強する気もないまま劣等生の間を上下していました。(当時は席次重視で勉強はこの席次のためにするという位、重視された)

2年の2学期のある日、柄にもなく家の机の上に数学『幾何』の本を広げたままにして座っていると姉の婚約者がそれを見て『勉強しているんだ、ああ幾何だね』と言って教科書をみていましたが、『これ、わかる？』と言って指さしました。私は『分からん』と言うと後(のち)の義兄は『こうやって証明すればいいんだよ』と教えてくれ、ついでに幾つかの問題を解いてくれました。

<こんな事ってあるのかな。> なんと翌日 数学幾何の時間、先生が突然『今日は試験をする』と言って答案用紙を配りました。みんなは『えっ』と言いながらもしぶしぶ答案用紙に向いました。

私もその用紙を見たら、何と昨日教わった問題があるではありませんか。3問中1問はしっかり解く事が出来ました。翌日の数学の時間に、先生は『駄目だなあ、君たちは全然わかってない、みんな零点だ！一人だけ30点が居る』『それは今中だ』みんなは『えっ！』と声をあげた。劣等生の今中がただ一人難問を解いた、それは皆を驚かせるには十分の出来事でした。以来クラスの秀才た

ちが私の所にやってくるようになる、私は幾何の勉強に真剣に取り組む。秀才たちは他の科目も優秀だ、必然私も他の科目とも真剣に取り組むことになる。

そのような事で、3年の1学期の席次は161人中15番になった。

⑩或る朝全校生の朝礼の時、校長が演壇に立ちこのことを話題に取り上げ『やればできる』と強調、全校生の知る事となった。私は心の中で言う“やれば出来るんじゃない”“もともと僕はバカじゃないんだ”と。そんなことがあってから私は勉強の時間が大幅に増えることになる。

でも劣等生仲間とも一緒に遊ぶことも忘れてはならない。彼らと共に遊んでから勉強するのは容易ではない。中間考査・期末考査前は徹夜で試験に備えるのが常套手段になった。

母は言う『何も試験前に徹夜勉強をしないで普段に勉強しなさいよ』と。

中高一貫校だったので、高校生になってからも同じパターンを続け通した。席次はひと桁にはなったが、5番以上になる事はなかった。

姉は私の蔭の先生と結婚。蔭の先生は晴れて我が義兄となった。

彼はキャリアの大蔵省事務官で 幾つかの税務署長など務めたが定年前53才であの世に旅立った。

(当時の定年は55才)1人息子が阪大の大学院生の時である。

その息子はソニーに勤務して3年前に定年、今65才、3人の孫が居る。

<ひとときれ 回顧>

今中基

私は後年2001年から仕事で毎月中国に行くことになり、2003年から13年間大連に居住した。

(A)よもやまを『れんげそうはんせい』と題し電子書籍出版。引き続き[現在迄に]15冊を発行。

(B)徒然なるままに IT 活用作品集 “松翁論語の英・中・日本語変換” “日本お伽噺中国語編”

”兵馬俑訪問記” など24作品を制作 cloud [自己サーバー上] 保管。国内外からも視聴できる。

(C)2014年5月より週刊ブログ【中国世相一面】を(毎週水曜日掲上) 現在500回を超え継続中。

(A)

(B)

(C)



上部(A)(B)(C)それぞれの写真を Click ! して内包資料をごらんください。